別紙２

論文審査の結果の要旨

本間　栄男

本論文は、１７世紀ネーデルラント（通常オランダと呼ばれる）における機械論的生理学の展開を、ラテン語で書かれた主要医学テキストを克明に読み解いてなった極めて独創的で卓越した研究である。

本間氏は、ネーデルラントにおける医学文献の検討を、ヒッポクラテスやガレノスに代表される古代医学書の１６世紀半ばにおける復興から始める。１６世紀においては、医学書、特に生理学書が、「オエコノミア・アニマリス」（動物身体内の諸部分の秩序ある配置を意味する）という特異な概念に注目し始めることにより、身体の諸機能論に特化されたことを突きとめる。この変化には、ルネサンス以降、頻繁に起こった解剖学的諸発見の影響するところ大きかった。そのうち、英国のハーヴィの血液循環説や、ネーデルラントに在住していたデカルトの思想、さらにガッサンディによって復興した原子論哲学の影響が生理学書に顕著に現れ始める。１７世紀中葉から末までのネーデルラントでは、とくにデカルトの影響が甚大であった。それは機械をモデルとする図式が身体機能を説明するのに援用されたため、「機械論的生理学」とも呼ばれた。本間氏が巨大な学問的努力によって解読したのは、とりわけ、この種の文献であり、デカルト派機械論的生理学の興隆と衰退であると言うことができる。デカルトの機械論的哲学はレギウスに現れ始め、クラーヌンで頂点に達する。１７世紀中葉から後半は、これらの医学文献の刊行でにぎわった時代であった。それらの生理学文献は、化学、機械の比喩・モデル、図示で視覚的は明晰判明性を追求し、人々の関心をかった。ところが、デカルト主義者だったデ・フォルダーが 1670 年代にロンドンのロイヤル・ソサエティを訪問し、デカルトのとは別の、ニュートンの実験哲学に触れたことによって、風向きが変わり始める。デカルト哲学よりは、ニュートンの経験主義的で力学的な実験哲学が新たな影響を発揮し始めるのである。そのことは、１８世紀初頭にブールハーフェが学界に華々しく登場することによって決定的になる。かくして生理学書におけるデカルト派の機械論的哲学は、その狭義の歴史的役割を終え、別の形の機械論的哲学に主役を座を明け渡すことになるのである。

本論文の独創的貢献をもっと詳細に述べれば、以下のとおりである。

（１）１７世紀ネーデルラントの膨大なラテン語生理学書を地道に読み解く作業によって、近世機械論的医学の実像の解明に挑戦し、一般に近代医学は「機械論的」であると言われるが、その特性をデカルトの影響を受けた生理学書において明解に描き出すことに成功した。

（２）デカルト派生理学書の登場の実相を、その制度的背景まで含めて明らかにし、かつその衰退の様相と理由までをも解明した。

本論文は、その研究手法の地道さによって際立っている。デカルト派の機械論的生理学の興隆と衰退の医学史的意味をテキスト分析にとどまらず理論的に論じれば、論文はもっと説得力を増したかもしれない。けれども本間氏はそのことを十分理解しており、また地道なテキスト分析に徹することも学問的に堅実であるという解釈もありうるので、審査委員全員は、本論文をもって学位取得のためには十二分であると判断した。本論文は、本間氏が国際的に第一線に立ちうる科学史家であることを示した。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。